

中学生が胸に抱く思いを発表する少年の主張大会。白鷹中学校三年生の今野璃夏子さんは、長井地区大会第一位、置賜ブロック大会で上位三名に選ばれ、山形県大会において優秀賞を受賞しました。祖母、父、兄——家族との間で芽生えた気持ちをテーマにした、心温まる主張を紹介します。

黄色い喜び

白鷹中学校三年 今野璃夏子

私の朝は、五時三十分からスタートします。中学二年の春から毎日です。

「今日の卵焼き、おいしかったよ。」兄からさりげなく言われた一言でしたが、私にとってはとてもうれしい言葉でした。兄の弁当を作るようになって初めての褒め言葉です。

小さいころから母のいない私の家では、お弁当といえば、いつもお父さんがつくってくれるものでした。父は、長距離トラックの運転手。最低でも三日間は家を空けます。父がいないときは、祖母が弁当を作ってくれましたが、祖父が亡くなり、祖母でやっていた畑を、祖母が一手に担うことになったのです。それで、高校に通う兄の弁当を作る役割がこの私に回ってきたのです。

初めは「ばあちゃんに作ってもらえば。」と言ってみましたが、「璃夏

子、お前がやりなさい。」と父に言われ、しぶしぶ始めた弁当作りです。でも、どうせやるなら見た目の悪い弁当は作りたくない。兄に恥ずかしい思いをさせたくないとは思って始めたものの、料理などほとんどやったことのない私にとってそれはすごく大変なことでした。

しばらく悪戦苦闘を続けていたある朝、八六歳を超えた祖母は私より早く起きていました。

「璃夏子、卵使ってみたらいいんでねが。」

ばあちゃんの一言。実は最初に卵焼きにチャレンジしていた私は、失敗の連続で諦めていたのです。

「璃夏子、お前さ苦労かけるなあ。ばあちゃんされつといいなだげんど。」明るいばあちゃんがこんなことを言うなんて……。きつと、私は仏頂面で料理をしていたのでしよう。

どんなことがあっても言葉で気持ちを伝えていたのに……。ごめんね、ばあちゃん。その日から、ばあちゃんが味付けを、父が卵焼きの巻き方を教えてくれました。何度も何度もフライパンを握りました。喧嘩しながらもばあちゃんと父との楽しい

時間。そうしたら、「絶対おいしいものをつくってやるぞ。」不思議と、毎朝五時三十分が楽しみになってきました。「璃夏子、卵の黄色に、野菜の緑、そして、元気の源を作る肉……、栄養もあるし、彩りもきれいだよ。」ばあちゃんのこの言葉を、私自身が繰り返して、兄の弁当は仕上がります。時々、朝食にもこの彩りをおすそわけしながら……。

最近のことです。長距離の運転から朝帰ってきた父に、卵焼きを食べてもらった時です。「璃夏子、うまいな。」父の短いこの一言に、私は顔をあげることができませんでした。なんだか、涙がこぼれそうだったからです。いつも馬鹿話をして、大喧嘩をしている父なのに……。

友達からは、「毎朝弁当作るなんて大変だね。」と言われますが、今の私にはそんな思いは全くありません。祖母がいて、父がいて、洗濯や風呂洗いをする兄がいて、喧嘩をしながらも家族を思う気持ちちはみんな同じ。「お

いしいね。」という言葉は、かけがえない私の家族をつなぐ大切な言葉。他の人から見れば、小さなことが毎日続いていく、続けようとする気持ちがとても大切なんだと感じます。ふつくと幸せな黄色い卵焼き。私にはもう一つ作ってみたい料理があります。それは、ばあちゃんが作るナスの煮物。色はくすんできますが、美味しさは天下一品。私の家族の歴史がギュッと詰まった美味しさ。その美味しさと、美味しいって言える気持ちと心をつなぐ、目には見えない心の彩り。

「ナスの煮物おいしいよ。」

そう言ってもらえる日を夢見ながら……。

